シンガポール日本人学校における総合的な学習の時間と実践

前シンガポール日本人学校小学部チャンギ校　教諭
栃木県栃木市立大平西小学校　教諭　越　沼　有　子

キーワード：総合的な学習の時間、国際理解、現地理解、シンガポール

１．はじめに

赤道直下に位置するシンガポールは、国民自ら「リトル・レッド・ドット（小さな赤い点）」と自嘲めいて表現するほど小さな国である。しかし、約557万人が住み、人口密度は世界第２位、高層ビル群が立ち並ぶアジアを代表する国際都市国家である。人口の約74％が中華系で、次いでマレー系13％、インド系９％と続く多民族国家である。そのため、中国語・マレー語・タミル語・英語の４か国語を公用語とし、様々な文化や宗教が仲良く共存している。日常会話は英語が多いが、シンガポール特有の「シングリッシュ」と呼ばれる方言（訛り）が飛び交っている。また、昼夜の長短がなく、１年を通して朝７時に太陽が昇り夕方７時に沈む。四季はなく毎日が真夏日だが、シンガポーリアンは室内をキンキンに冷やすことをサービスと考えているので、ちょっとした買い物に行くにも長袖の上着が手放せない。

そんな混沌としたシンガポールに赴任し、教員として様々な出会いや経験の機会をいただいた。その中から、３年間の勤務で行ってきた教育活動の一つを紹介したい。

２．シンガポール日本人学校小学部での取り組み

シンガポール日本人学校は、小学部クレメンティ校・小学部チャンギ校・中学部ウエストコースト校の３校がある。私が勤務したチャンギ校は、全校児童900名を超える大規模校だ。児童の大半はスクールバスを利用し、近い子で片道15分、遠い子は１時間近くかけて登下校している。日本の学習指導要領に準拠しながら、レベルに応じてクラス分けした英会話の授業、イマージョン水泳・音楽など特色ある英語教育が行われている。ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）教育では、４年生以上の児童にノート型パソコンを１人１台貸与し、それぞれが自分のIDを持って情報を活用している。また、特別支援教室が併設されていることも、日本人学校の中ではめずらしい。保護者は総じて教育熱心で、教育活動にも積極的かつ協力的だった。

３．総合的な学習の時間（3学年実践例）

（1）年間計画の精査

本校でも日本と同様に、３年生から総合的な学習の時間が始まる。それぞれの学年で、教科を横断したクロスカリキュラムを意識した年間指導計画を作成し、現地理解教育・外国語活動・キャリア教育などを取り入れつつ特色ある学習を行っている。それらの中から、平成29年度に第３学年主任として取り組んだ総合的な学習の時間について紹介したい。

指導計画を練る段階で前年度までの取り組みを見直した。それまで①本校ローカルスタッフとの交流、②ラン園見学、③ウェットマーケット見学の３部構成だったものを、前年度の担当との引継ぎから、課題が豊富で最も探求の奥行きが深い③のウェットマーケットについて年間を通して学習することにした。そして、テーマを「不思議発見　ウェットマーケットはかせになろう！」と設定した。同じ場所をくり返し訪れることで、最初は課題発見と興味関心の喚起、２度目は調査と確認作業、最後に考察のための再訪と、スパイラル的に学習することができるのではないかと考えたからだ。また、３年生にとっては初めての総合的な学習の時間なので、ねらいや方法、まとめ方などを丁寧に指導するオリエンテーション的な時間も確保したいという思いもあった。さらにいえば、３学年は他学年と比べて校外学習が最も多いことから、活動を精選する意図もある。学年間のつながりとい

う観点では、4年での地域学習（チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリート）の班別調査の基礎を養い、パワーポイント等を使ったプレゼンの技術習得にもなると考えた。

平成29年度の第3学年は6クラスあり、新卒採用担任を2名含んでいた。できるだけ同質の活動と学びを確保したかったので、総合的な学習の時間はクラスの枠をなくして学年全体で取り組むこととした。そこで、学年掲示板の活用、資料の共有、教師の役割分担、ティームティーチング、授業参観などを工夫した。

(2) ウェットマーケット

ウェットマーケット（wet market）とは、市井のシンガポール人が多く利用する市場のことである。由来は、肉や魚を扱う店が床を水で掃除することで清潔を保ち、常に床が濡れていることからその名がつけられたと言われている。食料品だけでなく日用雑貨から衣料品まで何でも売っており、ホーカーズ（屋台街）が併設されていることが多い。スーパーマーケットよりも価格が安いこともあるが、HDB（Housing Development Board））と呼ばれるいわゆる公団住宅に隣接している場合が多く、シンガポール人の生活に根付いた存在なのである。

ウェットマーケットで売られる果物

(3) 具体的活動

シンガポール日本人学校に通う児童の多くは、シティエリアと呼ばれる市街中心部の高級コンドミニアムに住んでいる。そのため、日常の買い物はショッピングモールや日系スーパーを利用することがほとんどだ。保護者に事前アンケートを行ったところ、ウェットマーケットやホーカーズを利用する機会が少ない（あるいは全くない）という実態が分かった。そればかりか、「市場の匂いが苦手なので、マスクを持たせたい」とか「ホーカーの食べ物を食べられないので、お弁当を持参してよいか」という相談もあった。もちろん最大の配慮は欠かさないが、せっかくシンガポールに住んでいるのだから、子どもたちには、現地理解と交流の経験をさせてあげたいという思いが強まった。

ホーカーズで食事する人々

以下、学期ごとの学習内容である。

【1学期】

・総合的な学習の時間についてのオリエンテーション。

・ウェットマーケットについて、連休（代休を移動させるなどして、ゴールデンウィークが毎年10日間前後の休みとなっていた）を利用して家庭で調べる。調べてきたことは、各クラスで発表し、学年掲示板に掲示。

・タナメラウェットマーケットへ行き、疑問に思ったこと、不思議に思ったことを見つける。また、調べたことを確かめる。

・これから調べたい課題を各自がもつ。

【2学期】

・調べる方法（アンケート、インタビュー、観察など）を考えたり、班別行動の準備をしたりする。

・班別活動で課題を調べる。

・まとめ、中間発表する。（発表は授業参観に行った。また、発表はクラスを解体して行った。児童の投票により「タナメラウェットマーケットはかせ」を決定した。）

・友だちの発表を聞いて、確かめたいと思ったこと、もっと知りたくなったことをもつ。

【3 学期】

・班別活動で確かめたいこと、もっと知りたいことを調べる。今までの学習の総まとめとして、教師の作成した「タナメラウェットマーケット・ウォークラリー」を行った。お金を持っていき、昼食をホーカーで食べたり、家族にお土産を買ったりした。

・1 年間の活動をパソコン（パワーポイント）でまとめ、発表する。

(4) 活動の成果

チャンギ校の 3 年生は毎年 1 回、タナメラウェットマーケットを訪れていたので、今年度の下見の時、いくつかのお店の方から「日本人学校の子どもたちはいつ来るの？」と親しみを込めて質問された。今回は毎学期毎合計 3 回訪れたことで、お店の人達からはもちろんだが、子どもたちの方からもマーケットの人達と親密になれた。これは予想外の大きな成果だった。児童の感想にも「お店の人が親切にしてくれてうれしかった」「買い物をしたとき、オマケをしてくれた」「買物に来ていたお年寄りが話しかけてきてくれた」など、ローカルとの交流を喜ぶ様子が書かれていた。日ごろの生活の中では得られない貴重な経験となったことは間違いない。また、この学習を契機に、家族でウェットマーケットを訪れたという児童もいた。匂いや味を心配していた児童も、3 回目の訪問時には、昼食にウェットマーケットで買った物を食べられるようになっていた。些細なことかもしれないが、総合的な学習の時間の目的の一つである現地理解教育、家庭教育という視点からも成果があったのではないかと思う。

2 学期に行った中間発表会はクラスの枠を外し、毎回違う友だちと教師に向けて 3 回の発表を行った。そのため、回を重ねるごとにプレゼン技術が向上し、どの児童も堂々と発表することができるようになっていった。3 学期の最終まとめでは、児童が 1 人 1 台のノートパソコンを使い、ICT 教育に堪能な教師が中心として指導にあたることで、情報活用能力も高まった。このように、学年の教師がそれぞれの特性を生かして役割分担や共同作業を行うことができた。

【児童のまとめ（抜粋）】

・「HDB とウェットマーケットは、屋根がついた道でつながっていた。ウェットマーケットにはお年寄りの姿が多かったので、HDB にはお年寄りが多く住んでいるのではないかと思った。また、タナメラウェットマーケット以外でも、ウェットマーケット、HDB とホーカーは、同じ場所に作られていることが多い」

・「日系のスーパーに行ったときは、肉や魚はトレイにのせてラップをして売っていた。ウェットマーケットは氷の上に直接置かれていた。ゴミが出ないので、ウェットマーケットの方が環境にやさしいと思った」

・「ピンク色の液体を見た時、何かと思い店の人に尋ねると、油だった。それも料理で使うものではなく、食べることはできない油だった。シンガポールでは、祭で火をともすことが多いので、食用でない油をたくさん売っているのかなと思った。色が違うのは、間違えて食べないようにするためかと思った」

４．おわりに

「コピ（シンガポールの定番コーヒーの一種）について調べようとしたとき、お店のおじさんがとても親切にしてくれた。コピとコピオの違いについてもよく分かった」と飲み物の違いについてまとめた男の子がいた。彼は 2 年前、1 年生の時に担任したのだが、その時は日本からシンガポールに来たばかりで英語も分からず、英語の時間に泣いてしまうこともあった。しかし今では、ウェットマーケットで臆することなく店の人と英語でやり取りができるようになっていた。彼の発表を聞いた時、シンガポールに来てからの彼の努力とご家族の支えを想像し胸が熱くなった。

3 年間の勤務で常に忘れないようにしていたことは、子どもたちは自分から望んでシンガポールに来たわけではない、自分で望んでこの環境にいるわけではない、ということだった。さまざまな子どもたち、さまざまな保

護者と話をするうちに、それぞれの気持ちに寄り添いながら教育活動を行いたいという思いが年々強くなっていった。その思いを受け止めながら、縁があって暮らすことになったシンガポールのことを少しでも理解し、少しでも学びにつなげてほしいという思いをもちながら取り組んだ。

最後に、つたない学年主任の計画を理解し補完し協力してくれた学級担任の先生方の支えがあってこそ、このような活動が行えたと心から思っている。感謝の気持ちを述べて、実践記録を終わりにしたい。